

# 衣

## 愛知岐阜三重静岡旗染業組合連合会

### 風にたなびく旗が

### 醸し出す風情

#### さまざまな目的で使われてきた旗

旗は、文字やデザインを施し色を付けた布や紙のことで、形や大きさなどに明確な定義はありません。仏を供養するために使われたサンスクリットのパーカーが語源だといわれています。また旗は旗竿せいはの先に付けた旗飾のことですが、「はた」とも読み、旗そのものも表します。

旗は時代などによってさまざまな使われ方をします。国旗や社旗、校旗のように集団を表現するシンボルであったり、戦国時代の旗指物のように敵味方を区別する目印、さらには「錦の御旗」のように権威の象徴として用いられることもあります。現在では「交通安全」の幟のぼりや商店などでセールを知らせるものとしても使われています。ずらりと並んだ旗のある風景は独特の風情をつくりだしてくれます。

#### 伝統の技を次世代に残したい

同じ旗染と言っても、大漁旗、鯉のぼり、建設現場などでよく見られる安全旗、神社の神前幕など、さまざまです。戦時中は出征兵士を送る小旗なども

ありました。

連合会の設立は昭和37年(1962)です。当時は漁船の新造が多く、お祝いの大漁旗などの注文がたくさんありました。

また、名古屋の広小路には昭和48年(1973)までホルモン焼き、おでん、焼き鳥などの屋台が軒をそ

ろえており、その屋台を囲む大型の幕や、屋台が廃止になってからも店先に架ける暖簾のれんなどさまざまな需要がありました。

最近では大量に使うものは印刷によってつくられ、伝統的な手描きや捺染なせんの需要は減っています。平成24年(2012)に57軒(愛知は22軒)あった組合員も令和3年は44軒(同15軒)と減少しています。

そうした変化に対応するため、コンピュータで文字を打ち込み大型のプリンターを使用する組合員も増えています。ただ、端午の節句や子どもの誕生日など、お祝いの床の間飾りとして使う豪華なものや芸術的な一本もの、あるいは小ロットの印刷ではかえって高額になるものは、伝統的な手描きや捺染が用いられます。

機械化が進む一方で、伝統を維持し、将来へとつなげていくためどういった方向を目指すのかがいいのか手探りが続いています。



節句祝いなどの床の間飾り



イベントや地域の交通安全を呼びかける幟